TEI 鼎談 DAN
学問と職業のカンケイから、大学進学を考える本
あなたは、まだ何にだってなれる。

東京大学 法学部

1877年に東京大学創立と同時に法学部が発足しました。以来、一貫して法学と政治学を中核とした教育研究を通じて、幅広い視野を備え、法的思考と政治学的識見の基礎を身につけた人材の養成を目的としています。

■大学生
大塚理央 さん

■先生
宍戸常寿 先生

■卒業生
岩本寛正 さん

CONTENTS

●プロフィール　●大学生活について　●就職活動、仕事について
●5年後に向けて　●高校生へのアドバイス

●プロフィール

東京大学法学部の特徴を教えてください。

■先生
まず東大共通の特徴として挙げられるのが、教養学部の存在ですね。東大では今もレイトスペシャリゼーションの理念を堅持し、入学時から専攻を選択するのではなく、入学後２年間にあたる前期課程は、全員が教養学部に在籍し、幅広い教養を身につけます。その後、３年次より、法学部への進学を希望する人は、法学を総合的に学修する第一類 (法学部総合コース)、弁護士や裁判官、あるいは企業の法務など法律の専門家を目指す人のための第二類 (法律プロフェッションコース)、公務員やマスメディアへの就職を希望する人を対象に、政治学を中心に学修する第三類 (政治コース) の中から自分の志向に合った学部を選択します。

■大学生
教養学部の存在は、すごく魅力だと思います。と言うのも、実は私は入学当初は法学部への進学は考えていなかったんです。ただ、前期課程の必修授業の中に面白い授業があって、その担当が法学部の先生だったことから法学に興味を持ちました。もし教養学部という入り口がなければ、私は法

学を学ぶことはなかったかもしれない。そう考えると、自分の将来の選択肢を広げるチャンスになったと思います。

大学内における法学部の位置づけを教えてください。

■先生

法学部は文系学部の中で文学部と並んで最も古い歴史を持ち、理系における医学部・理学部と同様、東大の中でも最も伝統と誇りある学部として知られています。

先生の専門分野を教えてください。

■先生

私は憲法を担当しています。高校生のみなさんもこれまで日本国憲法について学んできたとは思いますが、私の授業やゼミでは単に憲法の条文を暗記するといったことは求められていません。まずはどのような思想の下で憲法がつくられたのか、歴史的背景を理解すること。その上で現代社会において憲法がどのように運用されているのか、どんな問題が内在しているかを知り、これからの社会における憲法のあり方を考えることを第一義としています。学生にとっては、知識を授かるのではなく、自ら「考える力」を育てる場となります。ここで多くの人と出会い、意見を交換し、自らの可能性を広げることで、多様化の進むグローバル社会で活躍し得る人材を育成します。

●大学生活について

東大法学部で過ごしたおふたりだから言える特色・魅力を教えてください。

■大学生

法学部には、学問の最先端にいる先生が数多く籍を置かれています。何気なく手に取った専門書の著者が、学部の先生だったということも東大なら珍しくありません。法学の権威と呼ばれる方から直接学びを得られるのは東大の特権だと思います。

■卒業生

私にとっては、学問の豊かさがいちばんの魅力でした。近年、お金にならないという理由から実学につながらない授業を縮小する大学が増えています。一方、東大には、たとえばローマ法のような、マニアックな研究をされている先生方がたくさんいる。ローマ法なんて学んで将来何の役に立つんだと訝しむ方もいるかもしれませんが、こうした一見すると何の実益も生まない研究こそが、学問を豊かにするんです。それを享受できるのは、東大ならではの贅沢な楽しみだと思います。この差は、国公立トップである東大の強みと言えるのではないでしょうか。

■先生

そこは非常に重要ですね。そもそも現在、我が国で運用されている法システムは、明治維新以降、西洋から輸入した法律観がベースとなっています。では、西洋の法制度の基盤は何かと言えば、それはローマ法です。つまり、ローマ法を学ぶことは、現在の日本の法律の根幹を学ぶことなんです。AI の急速な進化、IoT の普及など、いわゆる第 4 次産業革命によって社会のあり方は今後ますます変わっていきます。当然、法制度や運用ルールも社会の変質に適応していかなければいけません。こうした法の変革を議論する際、基礎となるのはやはりローマ法なんです。実学も大事ですが、目の前のことばかりを追いかけても本質的なアプローチは図れない。法の歴史や思想には、先人たちがこれまでどのように問題に立ち向かい対処してきたのか、知恵の結晶がつまっている。それを学び、

骨太な議論ができる環境があることが、東大法学部の総合力の高さを証明しています。

■卒業生

総合力と言えば、学べる幅の広さも東大の特色だと思います。実際、私は在学時代、法律の授業だけではなく、社会学や文学の授業も積極的に受けていました。場合によっては、理系の授業に顔を出すこともありましたよ。理系の学部も同じ敷地内にあるから、自分次第で文理を問わず興味のあるテーマをカバーできるんです。それは、総合大学ならではの醍醐味だと思います。

東大法学部だから出会える人材の面白さ、多様性について教えてください。

■卒業生

語弊があるかもしれませんが、東大に入ってくる学生は基本的に自分の学力について一定の自信があります。だから、たとえ相手が教授であっても、どこか「試している」ようなところがあるんですね。授業の最中に、先生のおっしゃることに対して「それは違うんじゃないですか」と学生が吹っかけるのも日常茶飯事。良くも悪くも議論体質というか、相手を論破するのが好きな人間が多く集まる傾向にあるということは、東大法学部の特色のひとつと言えるかもしれません。

■先生

その体質はあながち悪いものではないというか、教員にとってはむしろ歓迎すべきものなんです。東大法学部にはその年代の中でかなり学力の高い学生たちが集まります。彼らから発せられる質問は非常に本質的で、学問の最先端にふれるような発見と驚きに満ちている。我々教員にとっても、そうした優秀な学生と真っ向から対峙できる授業は、毎回が真剣勝負なんです。大学とは本来そういう場であるべきものです。東大法学部は、そんな大学本来の性質を今に残している学部のひとつと言えます。

■卒業生

これは私の感覚値ですが、東大生をカテゴリー分けすると、地頭は普通なんだけれど、不断の努力を重ねて入学した真面目タイプが全体の 70%。勉強量はそこそこなんだけど、生まれた持った地頭の良さで合格を勝ち取ったタイプが、25%を占めています。そして残りの 5%が、いわゆる天才肌の人です。この 5%の中に非常にクレイジーな人がひしめき合っているという印象ですね。

たとえば私の同期には、書き言葉がすべて旧仮名使いという友人がいました。もちろんメールも旧仮名使い。「我思ふ」なんて書き出しで送ってくるわけです。一般常識から見れば、相当痛い人間ですが、その後、彼はドイツへ留学し、現在は東京大学大学院法学政治学研究科の助教の任に就いています。しかも、今も何ら当時のスタイルを変えていない。自分らしさを貫き通し続けているのだから、やはり天才肌の人間は恐ろしいなと思います。

■先生

何かに突き抜けている人ほど優秀だという側面はあるかもしれませんね。その彼がドイツへ留学したのも、ドイツ法を学ぶためで、19 世紀ドイツの君主王家のルールに関する論文を書きましたが、それは立派なものでした。こうした研究をただの道楽のように思う人もいるかもしれませんが、実は現代社会の問題を考える上で、非常に価値があるのです。

たとえば、最近では天皇の生前退位が国民的議論となりましたが、そもそも皇室典範自体、ドイツをはじめとする各国王家のルールを研究してつくられたもの。ですから、ドイツ法を学ぶことで、生前退位というテーマについても別の切り口から光を当てることも可能となります。大学で学んだ知識は、広くこの社会を生きていく上での知恵となり武器となるのです。

■大学生

おっしゃる通り、自分の想像を超える優秀な人材に出会えるというのは、東大だからこその醍醐味

だと思います。大学に入ってから、目の覚めるような頭脳を持った同級生を何人も見てきました。

たとえば、人と話していても、一度で自分の発言の趣旨を完全に理解してもらうことは難しい。「それはこういう意味だよね？」「こういう認識で合っている？」と対話と確認を重ねることで、意思疎通を図るのが一般的なコミュニケーションだと思います。でも、私がこの大学で出会った人の中には、一度で人の話を理解できて、しかも相手の話を自分の言葉で完璧に説明できる人がいました。その人に関しては、完全に規格外。どういう頭脳をしているんだろうと、頭の中身を覗きたくなります。

■先生

それは優れた法律家に共通する資質でしょうね。なぜなら、法律家のもとには様々なトラブルを抱えたクライアントが訪れます。そしてそのほとんどのクライアントが専門的な法律知識を備えてはいない。専門用語を知らないクライアントに代わって、クライアントの抱えたトラブルや状況を、法律の言葉で説明するのが、法律家の役目のひとつ。ですから、人の話を一回で完全に正しく理解し、それを別の言葉に置き換えて説明できる能力は、優れた法律家の条件とも言えるのです。

特に刺激的だった授業を教えてください。

■卒業生

井上達夫先生の法哲学はとても楽しかったですね。先程実学の話をしましたが、法学部でいう実学とは、自宅の敷地まではみ出してきた隣家の柿の木を折ったらどうなるか、という類のもの。残念ながら私はそういったことにあまり興味が持てなくて、それよりも法とは何か、公平とは何かを問うような哲学めいた授業の方が知的好奇心をそそられたんです。井上達夫先生の法哲学は、まさにその典型です。授業では、正義とは何か、正義を実現するための仕組みとはどんなものかといった抽象度の高い議論が展開され、毎回、これまで突きつめて考えてこなかったことに向き合える分、多くの気づきを得ることができました。

■大学生

私は、ダニエル・H・フット先生の法社会学ですね。法律と日本社会の関係性を考察する授業なのですが、アメリカ人の先生らしく随所に海外の視点が盛り込まれていて、それがとても新鮮でした。

■卒業生

こう振り返ってみると、面白かったと思うものは、やっぱりゼミが多いんですね。東大法学部のゼミは、一般的な大学のように２年かけてひとつのゼミを履修するというものではなく、期間は半期、複数掛け持ち可の、いわば少人数制授業のようなスタイルをとっています。少人数だから学生とも先生ともフェイストゥフェイスで話すことができた。それが楽しくて、私は大教室の授業よりもそうしたゼミを好んで取っていました。宍戸先生にもゼミで大変お世話になりました。

また、法学部に進む前、駒場の教養学部でも少人数授業・ゼミはいくつかあって、例えば御厨 (みくりや) 貴先生のゼミはとても印象的でした。内容は、課題図書を読んで、それに対する論文を書き、議論をするといったものなんですけど、まだ前期課程の最中ですので、文理を問わずいろんな学生が集まってくるんですね。そうすると、文系の私とは根底から異なるような理系人間ともさかんに議論ができる。理系の人間って、我々のような文系とは思考回路からすでに別物。だから議論を交わしているだけで面白いんです。

あと、駒場の前期教養学部では、外部の先生を招いての講義もあったりします。その中で、私が今でもはっきり覚えているのは、小松美彦先生の生命倫理の授業です。最初に「『あしたのジョー』を全巻買って読んでくるように」と言われるところから授業は始まりました。そこから計 12 回の授

業のうち、10 回は脳死と臓器移植に関する問題を扱うのですが、ラストの２回で最初に取り上げた『あしたのジョー』と、昔人気のあった『高校教師』というドラマを題材に、「命とは何か」を考えるんです。当時の私は、学問とエンタメ・サブカルは別次元のものだと思い込んでいたので、漫画や映画、ドラマとオーバーラップさせながら、今日の学問における命題を説く小松先生のスタイルは、大変勉強になりました。

■大学生

ゼミで言えば、教養学部時代に受けたソーシャルビジネスを考えるゼミが面白かったです。環境問題や少子化対策、地方創生といった社会問題を扱う際、一般的には政治的な面から対処するか、あるいは学問的な見地から解決の手段を考えていくのが主流だと思います。でも、そのゼミではこれらの社会問題をどうすればビジネスの面から解決できるかがテーマでした。私はそれまで社会問題は収益化が難しく、あくまで官僚や政治家が対処すべき問題として捉えていました。けれど、そのゼミを担当した講師の先生は、一般の人が社会問題を身近に感じられるような体験型ツアーを企画して、それによって収益をあげ、ビジネスとして成立させることに成功されていました。当時の私にはその仕組みがとても革新的で、おかげで自分の視野も一層大きく広がりました。

●就職活動、仕事について

卒業後の進路について教えてください。

■卒業生

私は卒業後、住友商事に入社しました。もともとは官僚になりたくて東大を志望したのですが、それもすべて何か社会を変える仕組みづくりがしたいという漠然とした夢があったからでした。けれど､大学で見聞を広めていくうちに、世の中を形作っているもの、社会に影響している仕組みは、経済として成立していることが重要なのではないかと考えるようになりました。そこで、公務員ではなく、民間企業に身を置き、ビジネスパーソンとして研鑽を積むことを選んだんです。就活では商社、金融、コンサルを中心に回りましたが、その中でも最も私を評価してくれた住友商事に入社を決めました。

■先生

いまだに「東大法学部イコール官僚」と連想される方も多いのですが、実態はどんどん変わりつつあります。今では彼のように民間企業に就職する人が全体の約 37%。卒業後の進路は実に多様に広がっているのです。

お仕事をしている中で、大学で勉強したことが役立っていると感じることはありますか。

■卒業生

率直に言うと、大学で「勉強」したことが役に立っていると実感する瞬間はあまりありません。と言うのも、勉強とは文字通り「勉めて強いる」もの。やらされたことって、あまり身にはつかないんですよね。ですから、これは高校生のみなさんに伝えたいことなのですが、どうか「勉強する」のではなく「学ぶ」ことを大事にしてほしいです。

私がこの大学で学んだことは、先程から何度かお話ししていますが、多くの先生、そして学友と議論を重ねることで得た「考える力」です。人と議論を交わすことで新しい考え方を発見したり、時には先生からコテンパンに論破されたりします。そうしたひとつひとつの経験が、社会人としての私の根幹を支えてくれています。

それは、たとえばどういう場面で実感しますか。

■卒業生

私は今、日本車を海外に輸出する仕事をしています。つい先日まで、2年間、中東に赴任していました。海外に出れば、文化も価値観も生活習慣も異なる人たちと一緒に仕事をしていかなければいけません。そこで必要になってくるのは、異文化で生まれ育った相手の思考や価値観を理解・共感し、自分の言葉で再構築する力です。これはまさに大学での活発な議論を通じて育んだ力と言えます。

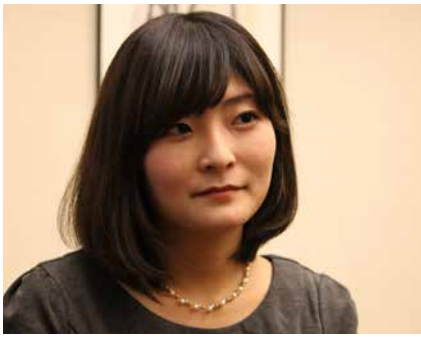
● 5年後に向けて

皆さんの5年後のキャリアプランを教えてください。

■大学生

私は国際社会で働く国際弁護士になりたいと考えています。そのために、今、4年生なのですが、卒業後は大学院に進学する予定です。

国際弁護士になりたいと思うようになったきっかけを教えてください。



■大学生

もともと漠然と夢見ていたことではありますが、それが確固たる目標となったのは、3年時に経験した1年間のカナダ留学がきっかけです。カナダは多民族国家で、1年の間にいろんな民族、文化的背景を持った人たちと出会いました。そこで私は正義や自由といった観念は、生まれ育った国家や地域、文化によって定義がまったく異なるのだということを実感したのです。現在、世界の各地で起きている紛争や衝突も、それぞれの提唱する正義や自由の違いが発端となっていることが多い。こうした現状に対して、何か自分なりにできることを見つけたくて、国際弁護士として国際経済、国際政治に関わりたいと考えるようになりました。大学院では、国際法や国際政治を中心に学ぶ予定です。

■卒業生

今、自動車業界は自動運転やコネクテッドカー、カーシェアリングなど新しい技術やサービスの登場により、ひとつの転換期を迎えています。この大きな波をうまくキャッチして、新しいビジネスモデルを自分自身で生み出すことが、ひとつの目標ですね。

■先生

私はこれからも変わらずに研究者としての道を邁進していきたいと考えています。今、自動運転やコネクテッドカーの話が出ましたが、自動車に限らず、あらゆる産業がICT社会で進化していくことはまず間違いありません。きっと今までにない問題も次々と表面化することでしょう。その時に、法律の専門家としてこれらの問題について深く洞察していきたいと思っています。もちろん新しい問題を追いかけるだけでなく、歴史的な足腰のある基礎研究も両輪で進めながら、若い研究者の育成にも携わっていけたら理想的ですね。

●高校生へのアドバイス

高校生のみなさんに、高校生活を送る上でのアドバイスをお願いします。

■大学生

私は大学に入ってから自分の将来について真剣に考えるようになりました。それは、やはり教養学部のある東大だからできたことだと思います。他大学であれば、入学時に自分の専攻を決めなけれ

ばいけません。そういうことを考えると、やっぱり高校のうちから自分の将来についてきちんと考えておくことは大事なのかなと思います。
将来を考える上で、おすすめしたいのは自分の世界を広げることです。今は高校生の間に海外へ留学したりインターンとして働く機会もあります。学校という枠を飛び出して、自分の知らない世界で自分の知らない人たちと関わる経験は、きっとみなさんの将来の選択肢を広げてくれると思います。

■卒業生

私は、「習慣をつけること」を意識してほしいと思います。どんな分野でもプロフェッショナルと呼ばれる領域に到達するには、1 万時間の鍛錬が必要だと言われています。1 万時間と聞くと気が遠くなりそうですが、ほんの 1 日 10 分でもいいから毎日何かをやる習慣を身につけておけば、その積み重ねが自分の武器になります。
私がもし高校生だった時に戻れるなら、もっと日常的に英語を学ぶ習慣をつけるでしょうね。ただ、それが今の高校生のみなさんにとってベストかどうかはわかりません。自動翻訳の技術がさらに進歩すれば、自分で英語を話せなくてもコミュニケーションをとることはできますから。そういう意味では、何を学んだらいいのかわからないという方は、ひとまずプログラミングをやってみるといいかもしれません。

■先生

それは私も同意見ですね。将来、プログラマーになるならないは別にして、プログラミングの知識はあった方が絶対にいい。なぜなら、今後も我々の生活にインターネットは欠かせません。私たちが日常使うあらゆるツールにインターネットは密接に関連してくることでしょう。その時に、たとえば自分が当たり前のように使っているスマートフォンが裏側でどんな仕組みになっているかを知っている人と知らない人では、大きく異なります。車を運転するのに、大まかでもいいから車体の構造を理解していなければ不安でしょう。何事も仕組みを知ることは、どんな道に進むにしても役立つものです。

では最後に改めて東大法学部の素晴らしさを教えてください。

■大学生

最先端の学びにふれているという自覚と誇りですね。それが、自分の知的好奇心を豊かに育ててくれました。

■卒業生

私は、人ですね。先生も、学生も、非常に優秀で個性豊かな人たちが揃っている。ここで得た出会いは、生涯の財産です。

■先生

東大法学部は、前身の帝国大学法科大学あるいは東京帝国大学法学部時代から、日本の法システムを運用する人間を育てる使命を負ってきました。従って、東京大学法学部の歴史とは、日本の近代以降の法システムの根幹とも言えます。歴史を辿れば、数々の偉大な先人がこの東大法学部の学舎から世に出ていてきました。そうした先輩を身近に感じつつ、日本の法システムの歴史の一員としての誇りと自覚を持って学べることが最大の魅力です。
また、繰り返しになりますが、大学は決して知識を授かる場ではありません。自ら「考える力」を育てる場です。ですから、手取り足取り何でも教えてもらえるという文化を、東大法学部に期待してはいけません。我々は、学生のみなさんを、自ら「考える力」を持ったひとりの大人として対等に扱います。ですからみなさんも決して内にこもることなく、たくさんの人と出会い、たくさんの経験を積んでください。東大法学部には、あなたの知的好奇心を大いに刺激する人と場があります。そのことを何よりも強くお伝えしたいですね。

大学構内のお気に入りスポット

■先生

生協の書籍部です。最新の専門書から今ではなかなか手に入らないような古い文献まで学問に関する書籍なら何でも揃っている、日本の知が結集した場所です。「東大の書籍部で最も売れている本」という言葉が本のキャッチコピーになっているのも、よく見かけますよね。そういう意味では、東大の書籍部は、知の流行の発信地とも言えるのではないでしょうか。

■卒業生

戸田にあるボート部の合宿所です。ボート部に在籍した私は、住んでいたと言っても過言ではないほど、大学での４年間のほとんどをそこで過ごしました。青春の想い出の場所ですね。

■大学生

法文一号館の廊下です。特に夜になるととても綺麗で、まるで『ハリー・ポッター』の世界に迷い込んだような気持ちになります。ぜひ本郷キャンパスに来た時は立ち寄ってみてください。

●インタビューに答えていただいた方々●

■先生

宍戸常寿先生

東京大学法学部教授

国立筑波大学附属駒場高等学校出身。東京大学法学部卒業。東京大学大学院法学政治学研究科助手・東京都立大学助教授・首都大学東京都市養学部准教授・一橋大学法学部准教授・東京大学法学部准教授を経て現職。関心分野は「憲法学」「国法学」「情報法」。主要著作には『憲法裁判権の動態』（弘文堂、2005 年）、『憲法 解釈論の応用と展開〔第２版〕』（日本評論社、2014 年）など多数。

■卒業生

岩本寛正さん

住友商事株式会社勤務

私立高田高等学校出身。東京大学法学部第２類（公法コース）卒業。住友商事株式会社で日本車を海外へ輸出する仕事に携わり、中東に２年間の赴任経験をもつ。文化も価値観も異なる海外での経験は、人間力を鍛える上でも良い経験となった。将来の目標は自動車業界の先頭に立ち、新しいビジネスモデルを自分の手でつくること。

■大学生

大塚理央さん

東京大学法学部私法コース４年生（2016 年度取材当時）

国立東京学芸大学附属高等学校出身。高校時代は部活動に力を入れており、ハンドボール部の部長して活躍、東京都ベスト 16 に導いた実績をもつ。大学時代は国際交流サークルに所属し、東南アジアの学生と共に社会問題に取り組む。学部３年次には交換留学生としてカナダへ１年留学。